



TITLE:

地理的景観の個性と[通]性

AUTHOR(S):

西龜, 正夫

CITATION:

西龜, 正夫. 地理的景観の個性と[通]性. 地球 1927, 8(3): 202-207

ISSUE DATE:

1927-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183324>

RIGHT:

地理的景觀の個性と通性

西 龜 正 夫

地理的景觀の意義

こゝに地理的景觀といふのは人間の活動と環境との相關的諸現象を指したものである。フランスの *Paysages géographique* と云ひドイツの *Landschaft* と云ひて居るのと略同一のものであるが、これを地理的風景とか風土とか云はないのは風景と云ふ語にも風土といふ語にも已に慣用の別の意味が含まれて居るから、混雜を避けるために比較的無難だと思ふ景觀の文字を用ひた。併しこれが最善の語だとも思つて居ない。

地理學を以て自然現象と人文現象とを研究する學問だとする二元的の考へには私共はとうしても同意し難い。地球上に起る凡ての現象そのものが、そのまゝ悉く地理學の對象たり得るとするのはあまりに範圍が廣すぎて、あらゆる學問の悉くを包擁する様になりはしないかと思ふ

雨が降り風が吹き火山が破裂し河が流れる等の諸現象を研究するものは物理諸科學の領域であらう。人間活動の諸現象そのものを研究するのは社會諸科學の領域ではあるまいか。地理學を自然地理學、人文地理學と二つにわけて、自然と人文とを別々に研究するといふのでは、地理學と云ふ獨立の學問は成立し得ない様に思はれる。蓋し地理學の任務は他に存する。他の諸科學の領域以外別に地理學固有の領域なるものがなくてはならぬと思ふ。

地上の諸現象は互に相錯雜し關係し影響して複雑極まるものである。これを個々に分析して物理學・化學・氣象學・經濟學・政治學などが別々に研究するのはそれでよいとして、それをそのまゝ寄せ集めて地理學と名づけるわけには行かぬ。これ等複雑な諸現象が各地域に綜合して表

現されて居るものを、そのまゝの結合體、所謂
地的渾一 *l'unicite terrestre* として認識して
これを研究の對象とし、その渾一の中から各要
素の相互の關係を分析研究する處に地理學の使
命があるのではあるまいかと私は考へて居る。

これは或は地理學なるものゝ一分科たる人文
地理學の範疇なのかも知れない。少くとも現今
の學界ではそうとしか認められないであらう。
それは兎に角として私どもはこの地理的景觀な
るものに就て研究したいと思つて居る。

個性と通性

地理的景觀はそれが地上に起る現象である處
の必然の結果として必ず若干の擴がりを持つて
居る。そして異なる地方には異なる景觀を見る
ことが出來て、そこに所謂分布の現象なるもの
が認められる。かく地方地方で景觀の異なつて
居ることを私は地理的景觀の個性と名づける。
恰も人間の一人一人が悉く違つた個性を持つて
居る様に各地の景觀悉くが何程かの特色を持つ

地理的景觀と個性と通性

て居る。地方色といふ言葉も大體に於てこの事
實に當てはまつた言葉である。併し人間にも個
性と同時に通性がある如く、地理的景觀にも個
性があると同時に一面に通性のあることも見逃
がせない。例へば食物に就て見ても米を常食と
する地方もあれば麥を常食とする地方もある。
魚類を主として食ふ民族もあれば牛乳ばかりで
命をつなぐ民族もあると云ふ風に、世界各地そ
れ／＼個性を持つて居るけれども、これ等食物
を得る方法は自然の供給を受けるか、人工によ
つて増殖させるか、貿易によつて他から得るか
の三方法を出でないで、世界到る處大抵はこの
三種の方法を併用して居る。家屋にしてもその
位置や構造や形式や材料やは千種萬別で著しい
個性をあらはして居るけれども、寒暑を凌ぎ雨
露を避けて安息の場所を求めると云ふ目的に於
ては世界一様であるから、そこに一種の通性な
るものを見出すことが出来る。

個性は民族により國家により地方により夫々
異なつて居るのは勿論、仔細に觀察すれば村と

村とで相違があり、もつと小さい一部落と他部落との間にも個性は認められる。併しさう云ふ近接した小區域に就て觀察すると、個性の相違は極めて微細になつて来る。支那人の服裝と日本人の服裝には明瞭な相違があるが、關東地方の服裝と近畿地方の服裝には大した相違がなくなり、大阪と京都とでは尙多少の相違を認め得るにしても近接した村と村とでは最早服裝の上に個性は認められない様になる。然るに個性はこれに反して、區域を狭くすれば澤山の個性があるが廣くするに従つて個性が少くなり、遂には全世界に通ずるものとなつては極めて僅少となるのである。例へば食物でも或一民族に就て見ればその材料や調理法や食事度數等に個性が見られ、もつと狭い一地方に就て見ると食事の作法等に至るまで個性があらはれて來て、遂に近接した部落と部落間には個性のみで個性はないと云ふ様なことになる。つまり個性と個性とは區域の大小により互に反比例して増減するものである。

個性の普遍化的傾向

文化が進むに従つて交通が開け、人間生活の交渉する範圍が次第に廣くなると、地理的景觀の個性は次第に薄れて行く。それは人間の模倣性に基づくものであらうか、例へば言語の様なものでも交通が開けるに従つて方言が少くなり交通不便の地には何時までも特殊の言語が保存されて行く。支那に方言の多いのも一つは交通不便の結果であつて、もつと交通が開けたら方言は少くなるに相違ない。これは簡單な例であるがこう云ふことは澤山ある。

日本人の衣服が次第に洋服に代つて行く事實を何と見るか。近頃は女子の服までが次第に洋服化して行く。改良服だとか折衷服だとか、新工夫だ新考案だとか云つて居たのは十年前のことで、今では何の文句なしに洋服そのものに移り行かうとして居る。洋食の普及も亦著しいもので、洋風の建築は田舎にまでも普及せんとし、至る處に文化住宅の赤屋根が見える。今後尙數

十百年の後には日本と歐米との生活様式の開きがだん／＼少くなつて行くであらう。

政治の様式にしても成立の古い國は君主國で新しい植民の建てた國は共和政が多いと云ふ原則が數十年前までは立派に立てられたものだが今では古い國にも共和政が次第に多くなり、君主政治の國も大抵は立憲政治となつて、少數者の專制から民衆政治へと變化して行き、結局その個性なるものが次第に薄れて行く事實は否まれない。

大戦前までは世界の各國は産業の上に著しい個性を有して居た。ドイツは化學工業の國、イギリスは紡績業の國、アメリカは原料と食料との國と云つてもよい程であつた。然るに大戦中に自給自足と云ふ語が流行し始めて、各國共に各種の産業に手を染める様になり、英國が化學工業に躍起となつた處から、その國民教育の主義さへも紳士教育から實業教育に變らんとする風が見え始めたなど、個性普遍化の傾向は著しいものがある。

交通が盛になれば單に人間が模倣をするのみでなく、原料の移動も亦自由になる處から天草の陶土が瀬戸焼の原料に使用される様になり、各地特有の陶磁器にも次第に個性が失はれて行く。そこで瀬戸焼と有田焼、九谷焼と清水焼の區別が専門家でも困難になつて行くのは、原料が共通になり繪摸様が互に模倣されることから来る必然の現象であらう。こう云ふことは織物業等にも著しく、久留米絨が必ずしも久留米のみに産せずして北海道や朝鮮の刑務所で織られたり、廣島縣の酒が灘酒の商標をつけて市場に横行する様なこともあり、青磁焼が内地で出來ると大島絨が京城から賣り出され、大阪で出來る貝細工が二見や青島の名物と名乗つて居る様な事實も數へ立てると際限がない。

そうかと思へば又一面には支那や印度の様な綿の原産地に紡績業が勃興して英國や日本のお株を奪はんとして居るし、アメリカの様な原料國がその原料をそのまゝ賣り出すことをやめて各種の工業を興すからヨーロッパとの間に個性

の相違が少くなる。

それに科學の進歩は種々なる天然の障害に打勝つて、人間の自然に對する適應方式を進化させるから冷蔵法の進歩によつて熱帶地方にも漁業が次第に盛になり、石油の無い國は石油の代用品を發明し、絹の無い國から人絹が生れて、それがほん物と違はぬ處まで進めばつまり文化の個性が失はれる様な形になつて來る。

自然の威力と個性の永續

斯く個性は次第に普遍化する傾向があるが、併し何程交通が發達しても如何に科學が進歩しても、遂に侵す事の出来ない自然の領域があつて、そこに依然として個性は永續するのを見る事が出来る。例へば奥羽地方には甘藷は出来なかつたのを、種々研究の結果近頃その栽培に成功して、暖國に劣らぬ相當の成績を擧げ得たといふが、たゞ苗の仕立は氣溫の不足でどうしても思ふ様に出来ぬので、茨城縣で仕立てた苗を汽車で送つて行つたのだといふ。つまり單に甘

藷の生産といふ點からは個性が失はれた様に見えても、苗を他から取り寄せるといふ方法に於て依然として個性が認められる。臺灣に鰹の漁業が盛になつて鰹節を産する様になつても、其漁獲から製造までの手段方法は決して薩摩や土佐と全然同一ではあり得ない。灌漑法の進歩によつて沙漠が沃野に變じつゝある事實も認められるが、やはり作物栽培の方式には特色があり同じ鐵筋コンクリートの建築でもアメリカと日本とは決して全然同一とは云はれないのである。こう考へて來るとつまり個性といふものは失はれない。一つの個性が失はれると同時にその裏に別の個性が芽ぐんで來る。これ全く自然の威力とも云ふべきもので、よく人間は自然を征服するといふことを云ふが、人間は決して自然を征服し得るものではなく、結局自然には征服せられるものである。否人間は自然に適應し順應して行くものであつて、その結果としての外觀は一樣に見えても順應の方式に地方地方の特色があるもので、この意味に於て自然の狀態が

述べばどうしても文化の様式も違い、地理的景觀はその環境に順應して一定の擴がりを超える

ことが出來ず、そこに分布現象なるものは永久に存在するものであるかの様に思はれる。(完)

岩漿内の均一平衡と火成岩成生作用に對する關係 (四)

(バウル・ニグリ)

結論

岩漿中の均一平衡の研究により種々な標式的火成岩を形成するに至る物理化學的原因に就いて茲に簡單な説明を與へたのである。若しも構造條件が岩漿分體作用の進む特種の方角を支配するものとすれば其の效果は地質學的要因が平衡關係に及ぼし得る影響に歸因するものである。されば均一平衡が地質學的要因によりて影響せらるゝ程度及び性質に就いては今後の研究に待つ可きである。而しながら各標式的岩石を形成する岩漿成分上の相異は單に漸進的のものであつて且つ明に認め得る重要な事實である。故に一つの岩石より他の岩石への推移にあるもの或は此等兩者の混合せる如き岩石が存在するも何等特異とするに足らざるものである。

或る岩漿が特種の條件に支配せられたとすれば岩漿は其の種屬よりはなれて全く異つた分體作用の結果全々異つた岩石を生じ得るのである。斯の如き相違を生ずるに至つた原因を

岩漿に作用せし外界の要因中に求め斯くして平衡移動に關係ある新しい資料を集むるのも又興味あるくばだてと云はねばならぬ。

更に均一平衡の研究は岩漿固結の成生物を系統的に研究する上に於いて極めて重要なものである。これより地中海式岩石即ち脱硅化作用が主として比較的不安定なる加里長石に働いて生じたる岩石と大平洋式岩石とを分離して考察するの必要も明になるのである。各標式的岩石の根本的分類も溶融物中にある各種の分子の安定度を絶えず考慮參酌することに依つて始めて成し得られ此の見解を以てするときは岩石分類の主標準として橄欖石の有無を考ふる事は決して無益な事ではない。吾々は既に硅酸の含有量の極めて大なる硅酸鹽も容易に脱硅化作用をなし得ることを觀察し又一度形成せられたる橄欖石も周囲の狀態によりて溶解消失し或は其のまゝ殘留することを知り得たのである。又白榴石を含む岩石が其の同質異形岩石よりばるかに離れた地域に生ずるといふことは白